Pagoda Tree

大江千里

幻冬舎

Pagoda Tree

大江千里

〈著者紹介〉
大江千里　1960年大阪生まれ。ミュージシャン。関西学院大学在学中にCBSソニーオーディション最優秀アーティスト賞を受賞し、83年デビュー。これまでに13枚のアルバムを発表、また俳優として映画やTVドラマ作品も多数。著書にエッセイ集『レッドモンキー・モノローグ』(角川文庫)『アポロで行こう』(集英社文庫)、小説『チキンライス・スープ』(角川書店)がある。

パゴダツリー
1995年12月22日　第1刷発行

著　者　大江千里
発行者　見城 徹

発行所　株式会社 幻冬舎

電話:03(5379)8011(編集)
　　03(5379)8086(営業)
振替:00120-8-767643
印刷・製本所:凸版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©SENRI OE, GENTOSHA 1995
Printed in Japan
ISBN4-87728-092-8 C0093

PAGODA TREE

I

菜(な)。

その名前はたしかに奇妙で、それは未だに覚えている。

彼女が生まれてから三年という月日が流れたあとのことなので、だったら彼女は、生まれてしばらくは名前で呼ばれたことがなかったわけで、とても信じられない話と言ってしまえばそうだ。

菜は時々、うつむいてくすくす笑うのだけど、それは何か暗号のようで、こっちにすればひもとくのにずいぶん時間がかかってしまう。

春、一面に菜の花が咲き乱れる広大な場所も、夜空に幾千もの星が小さな輝きを見せるこぼれ丘も、枝もたわわに実りそこかしこに落ちている果実を踏んづけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て、ひたすらぜいぜい息を切らして走った道も、どれも菜を語るに充分なヒントにはならないと思う。

菜の母親は風の精と言い、彼女が菜のために透きとおる声で口ずさむと、鳥は喜び、大きな弧を描きながら空を駆けめぐったし、村の民の誰もが一瞬作業の手を止め、その声に耳を傾けたので、吹いてくる微風にたとえられ、〝風の精〟といつしか呼ばれるようになったのだ。

菜の父親が誰なのかは皆知っているが、それは誰もコトバに出したりはしない。ただ、その民は皆、一様に物静かに目をうすく開け、語り合う。

その会話自体、俺など凡人の頭には理解できないトーンのもので、民は、伝達の手段としてコトバをあまり過大信仰していない。ただ、その時々にうなずき合い、交わし合い、ひきずり合い、その点と点とで一本の長い遥かなる時の流れを紡いでいくのだ。

すいかずらの木々の陰にぼんやりと紗がかかったような夕陽が落ちていく季節を迎えると、ある朝、彼らは椎の実と、前の年から取ってある松ぼっくりに、細

長いくねった棒のようなものを刺し込んでいく。

その仕事にとりかかるのが、彼らの冬支度といえるだろう。

ほぼ全体が白くなった髪とひげを逆立たせ、灰のきのこがつえにつかまりゆっくり立ち上がる。その姿は灰をかぶった大きなきのこのようだったので、いつしか〝灰のきのこ〟と呼ばれるようになったのだ。彼が大きく一回手招きすると、畑仕事をする大人も泥をこねって遊びほうけている子供たちも、やおら一か所に集まりだす。

その棒はたしか、前の前の、そのまた前の、まだお日さまが人の肩に深い色を刻んでいた頃、町からやってきた誰かが捨てていったものと聞く。

あとでそれが針金だと俺はわかったが、彼らはそうは言わないし、大事そうに一本一本を藁で編んだ一枚ぶとんの上に並べて保管しているのを見ると、とても針金などとひとことで呼べない代物に見えてくる。

その代物で民が大きなリースのような輪っかを作り、住居の前に飾り、それが彼らが冬の寒さに耐えるまじないのような役割を始める頃に、菜は生まれた娘だ

と聞く。

抜けるような白い肌と、茶色がかった瞳と、濡れたような髪を何本かずつ無造作に束ねている風情を思うと、菜は全能の力を持つ神がこの大地へ遣わした天使のような存在だと思えてしまう。

それほど彼女は浮世ばなれした並々ならぬ美しさを持っていた。

菜。

菜とは、民の持つ言語体系のなかで「太陽」を表すのだそうだ。もちろん民の間で陽の光は何かもっと大きな力の具象と捉えられていた。けれども俺は、彼女の美しさの前では、そんなことは砂粒ほどの意味すら持たないことを充分にわかっていたつもりだ。その名は俺にとって、陽に当たって解けた雪の結晶、崇拝に値するきらめき、俺なんかがいとも簡単にぽろぽろこぼしてしまうある種のノスタルジックな感情に代表される類(たぐい)のものであった。

そう、菜は永いこと、本当に永いこと、この世に生をうけたそのままの魂で生き続けていた。菜という生き物は、個体の喜び、きしみ、哀しみを感じる年頃に

なっても、おぎゃあとうぶ声をあげた時そのままの呻き声を身体中にみなぎらせていた。

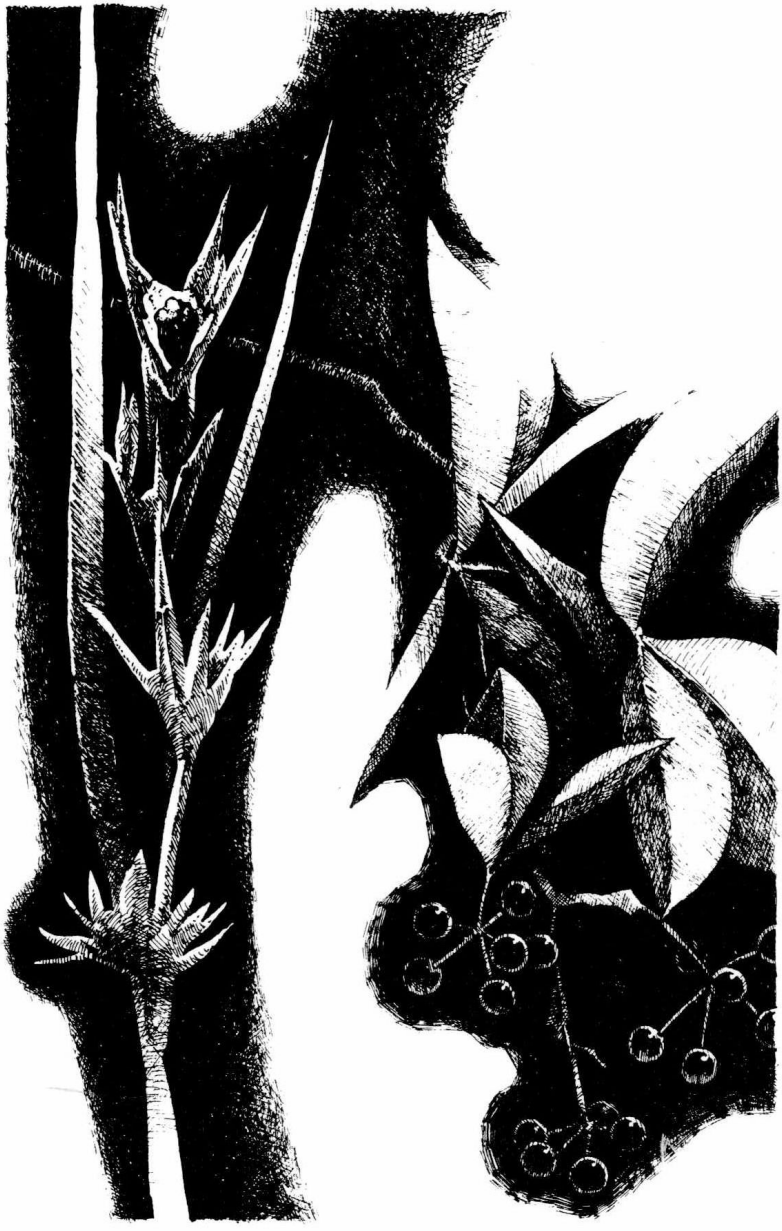
冬のお日さまは、ぽかぽか陽気の午後いちでも、なんだか頼りなく、情けない。木々の生命を充分に蘇生させるには、まだ時間がかかる。そんなことを知っているかのように冬の陽の光は、はかなげで遠慮深げなところがある。

この村では、虫や獣や魚たちはおろか人間も、緑を落とした葉っぱのむしろに身をくるみ、かすかに残った昼間の残り熱に、夜通しくるまっている。

灰のきのこが山の枯れ木を集めて燃やすたき火のそばにあぐらをかくと、一度もハサミを入れたことのないひょろ長いひげは、こうこうとオレンジ色に照り映え、菜はそんな灰のきのこの横顔が何よりも好きであった。

「人間はのう、ずいぶん無理をしとるぞお。おまえらもやりたいことをやるだけで、無理なことを好きこのんでやっちゃいかんぞお。な、菜よ。おまえにはそれがわかるじゃろう」

灰のきのこはそう言いながら菜の頭をひざにのせ、ほてった菜の頬を撫でた。



俺が菜という存在に巡り会ったのは嬉しい偶然だが、俺と村の民との巡り会いといえば、野うさぎが仕掛け罠にかかり、バタバタしてるところをひっ捕まったようなものだった。

俺の家族は、ぜん息持ちの俺の体質改善を理由に都会の生活を捨てて、この野山と海に近い小さな町に越してきた。俺は越してから一日たりとて、山に出かけない日はなかった。草の匂いや土の手ざわりなど、生まれてこのかたまったく縁遠かった俺は、嬉しくてこの地を駆けまわり、それまで以上にぜいぜいと発作ばかり起こした。そのあげく「やっぱりここは合わなかったのよ」と母に嘆き悲しまれ、父は無言で夜を過ごすようになった。

沈黙。

これも、この地の持っている大きな特権だ。

鳥の声さえしない瞬間が一日のなかにいくつもあった。

俺はこれまで、本当にいろんな音に囲まれて暮らしていた。

だから何も聞こえない、何ものも音を発しない世界を垣間見た時、心の底から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぎょっとした。そして魅了された。

月が表面のぶつぶつまで見せてくれる満月の晩。

俺は、声を殺して、枯れ草の中にすっころんだ。

すっころんだというのは、予期せずその場の草が寝てて、なんだかとても座り心地よさそうだったので、思わず自転車ごとそのなかに突っ込んだのだ。

すこん。

重い鈍痛がいっぺんにきて、俺は仕掛け罠にまんまとはまった。

2

俺は自分の肉体という箱をずいぶんかたくなに閉ざしていた。なぜなら、俺は物心ついた頃から、いつもうまく思うようにあやつれない自分の身体にいきどおりを感じていたからだ。この身体が消えてなくなれば、どんなにすっきりするだろう。心だけがぽっかり浮遊して、静かに朗らかに暮らしていけたらどんなにいいだろう。

いつもそう念じ続けていた。

それは祈りに似た感覚だったと思う。肉体の内に潜むまっさらな心を外気にさらしたかった。

だから俺は罠に落ちたあの満月の晩、不思議と怖いという思いには駆られなか

った。むしろ、「やった」と小躍りしたい衝動を覚えた。
鈍痛が頭まで響くのと同時に、心のバネがぎゅっと縮み、そのわずかの時間に、風の歌を聴き、月の明かりに照らされ、土のくさみを嗅いだ。
不思議と何も発作を起こさない自分の身体が、他人事(ひとごと)に思えるくらい冷静に深呼吸した。
いつも決まって、夕暮れの帰り道や真夜中のベッドでどこからともなく訪れる〝あの音〟を、この日初めて聞かなかった。
とくとくとくとく。
均等に刻む心音だけを響かせて横たわった無意味な俺の身体に、風や、月や土の精が容赦なく押し寄せ、まったく動かない、物体である俺のまわりを舞っているのをはっきり感じた。
ひい。
慣れ親しんだその音が喉の奥からぶり返して聞こえたのは、彼ら＝民の住居に敷かれたむしろの上で目覚めた時だ。

「熊の使いよ。おまえは妙にひざこぞうが大きいよのう」
気がついた俺の横に、憮然とした表情の老人が座っていた。灰のきのこだ。民の面々はそれぞれ木の皮やなめし革、枯れ草をつないだような薄い素材を重ね合わせたものを身につけて、一様に俺を覗き込んでいる。
「おまえはずいぶんのこのこ、この山地にやってきとったようじゃのう」
灰のきのこはぶつぶつひとりごとのように、「歩きまわれる足とは、このような足をいう」と言った。
「わしはこのような、月のごとく丸く大きいひざこぞうを見たことがない」
擦り剝いた俺の足をしげしげと覗き込んで、そうとも言った。彼らは一様におおっと、驚きとも落胆ともとれる呻きを洩らした。それは彼らの喉から出ている音なのか、それとも俺の頭がそのような声をキャッチしたのか、わからなかった。
俺はゆっくり上半身を起こして彼らをもっとよく見ようとした。
菜に初めて会ったのはこの時だ。
不思議そうに、俺のひざこぞうを見つめるたくさんの眼のなかに、そのふたつ

の水晶のような瞳があった。
菜は、ひざを抱くようにして大人の民に混ざり、不思議そうなまなざしで俺を見つめていた。
俺の気管支から発せられる不均等なリズムの怪しい音が、一瞬、ぴたりと止まった。
美しい眼には心を映す鏡が住んでいるのだと、ずいぶんあとになって俺は人から聞いたけれど、菜の眼は、窓から入る明け方の光を乱反射させて、三面鏡のように俺のちっぽけな存在をクールに映し出した。
瞬間、ある感覚を覚えた。
それは夏の日、汗だくの頭を冷蔵庫のなかに十秒間突っ込んだ時の感覚に似ている。自分の汗ばんだかたくなさが、ひんやりとした、それでいてあたたかな菜の瞳の輝きに一瞬抱きしめられたのだ。脳天を突き刺すような緊張が全身に伝わるのを感じた。俺はすかさずむっくと起き上がった。
窓から外を見回す。ドーム状の薄茶けた住居がいくつも見える。彼ら民はこれ

らのドームのなかに、ひっそりと住んでいるのだろうか。いくつもの煙がドームから立ちのぼる。そしてそれらのドームは小さな村落をなし、その村落を取り囲む大地は、俺がそれまで暮らしていたふもとの町へと続いているように見えた。いったいどれくらいの距離があるのか、ここがいったいどこなのか、そんなことを考えるより早く、俺の意識はもう一度遠のいた。

耳元で何人かがささやくように俺に話しかけたかもしれない。だがそれは、俺が今まで聞いたこともないほど安らかなものだったと思う。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com